

アジア諸国における生徒の個性に応じた教育に関する研究

—日本・インド・中国・タイを事例として—

The Study of Asian Education Focusing on the Students' Individuality;

Case Studies on Japan, India, China and Thailand

研究代表者 小原 優貴 (D1) 教員 杉本 均

研究分担者 李 霞 (D1) 馬場 智子 (M2)

〔研究目的〕

近年、アジア諸国の教育改革では、国内の多様性を尊重する目的から、学習者の個性を重視しようという動きが見られる。本授業では、こうした背景をふまえ、学習者の「個性」がアジア諸国においてどのように捉えられ、それが教育にどのように反映されているのか、西欧諸国における個性教育との比較を通して明らかにすることを目的とした。

〔研究経過〕

本研究では、上記研究分担者に、授業登録者として黄儒芬 (M1) さんを交え、それぞれの研究対象国である日本、インド、中国、タイ、台湾に加え、アメリカ、イギリス、フランス、ロシアにおける個性教育の取り組みの概要（個性教育の定義、個性教育の歴史的変遷）、問題点、成果などを明らかにした。そして、これらの成果を持ち寄り、アジア諸国とその他の国々との共通点・相違点を導き出し、アジア諸国において共有されている「個性」の概念、および個性教育の特徴とは何であるのか検討した。各国における個性教育のあり方を分類するにあたっては、「個別化・個性化教育のためのモデル」（加藤・河合、2002）および『『個性化』言説の類型』（森田、1995）を用いた。「個別化・個性化教育のためのモデル」は、個性教育の多様な教育方法のあり方を「指導の個別化」と「学習の個別化」を促進するものとに分けて、モデル化したものである。前者には、「一斉指導補足モデル」、「類型別グループモデル」、「学習ペースモデル」、「学習スタイルモデル」など、「個性」が、ある共通目的を全員が達成するための手段として考慮されるモデルが含まれる。後者には、「学習順序選択モデル」、「学習課題選択モデル」、「学習課題設定モデル」など、子どもたち一人ひとりの特性や個性そのものの伸長を目的とするモデルが含まれる。ここでは、子どもたちが、自分

の関心や興味に応じて学習課題や方法を選択できる（モデルの具体例については、各国の個性教育の概要を整理した本文を参照されたい）。また、『『個性化』言説の類型』は、縦軸に「規範化・理念化・象徴化」対「自然化・技術化・物象化」、横軸に「個体化」対「特異化」を設定し、個性教育を「学習の規範化」、「学習の自由化」、「学習の個別化」、「文化の個性化」の4つの領域に区分する類型である（類型の詳細については、本文の最終ページを参照）。

〔研究成果〕

各国の個性教育に関する考察をふまえ、『『個性化』言説の類型』にもとづき、個性教育のあり方について検討した結果、教育は国民国家形成に関わる公的事業であるため、各国とも基本的には「学習の規範化」を目指すことが分かった。こうした前提をふまえ、各国の個性教育の特徴を注意深く吟味すると、次のような傾向が見られることが分かった。

個人主義が浸透する西欧諸国（イギリス・フランス）では、児童生徒個人の個性の伸長を目的とする「学習の自由化」が理想として目指されつつも、現状としては、学力の差に応じた「学習の個別化」が展開されている。他方、アメリカは、「教育の個別化」を積極的に実践している点で他の西欧諸国と類似するものの、建国時から多民族社会として発展した経緯から、多様な集団の文化的特質を尊重する「文化の個性化」が重視されており、また、デューイらによる進歩主義教育の影響もあり、「学習の自由化」の理念が実態としてともなっている点で、他の西欧諸国とは異なる特徴をもつことが分かった。ロシアにいたっては、「学習の自由化」が進められつつある一方、全体性・普遍性を強調する「学習の規範化」の傾向がみられ、ヨーロッパに位置する旧社会主義国として、固有の特徴を有している。

翻って、アジア諸国を見てみると、西欧諸国と比較し、全体として、集団としての特性を尊重する傾向にあるが、グローバル化（≒西欧化）や近代化を背景に、個人主義的思想にもとづく「学習の自由化」や学力や学習スタイルの差に応じた「学習の個別化」が進められる傾向にある。ただし、一見、同じ足並みで個性に応じた教育が目指されているようにみえるアジア諸国の傾向は、より詳細にみると、それぞれの歴史的・社会的・文化的背景の差異に応じて、さまざまなベクトルで展開されていることが分かった。中国については、全体性・普遍性を強調する「学習の規範化」が比較的重視される傾向にある一方、多民族・多宗教であるインドとタイでは、「文化の個性化」に重点が置かれている。加えて、インドと中国では、国内の地域間格差や階層間格差を背景に、グローバル化（≒西欧化）や近代化が進む以前から「学習の個別化」が展開されてきた。また、日本と台湾は、比較的早くから産業化が進み、人的資源の効率的な選別・配分を目的とする「学習の個別化」を経て、本格的な「学習の自由化」が取り組まれるようになった点で類似している。

以上みてきた多様な個性教育のあり方は、それぞれの国（国々）で考えられている生徒の「幸福感・満足感」のあり方が、それぞれの国（国々）の文脈に応じて異なることを示すと同時に、それを実現するための方法もまた多様であることを示しているといえる。

（文責：小原 優貴）